



Title	廣瀬緑編著 『アール・ヌーヴォーのデザイナー M.P. ヴェルヌイユと日本』
Author(s)	宮島, 久雄
Citation	デザイン理論. 2014, 63, p. 124-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56335
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

廣瀬緑編著

アール・ヌーヴォーのデザイナー
クレオ, 2013年 112ページ

宮島久雄／高松市美術館

本書はアール・ヌーヴォーのデザイナー M.P. ヴェルヌイユ (1869-1942) について書かれた内外で初めての書物である。ヴェルヌイユの主著 (図案集) は『装飾のなかの動物』(1897) と『植物の研究』(1904) であり、ともに『ヨーロッパ花の装飾文様』(1, 学研, 1981), 『アール・ヌーヴォー装飾文様』(佐野敬彦編, 学研 1984) に復刻されているが、その人物の詳細は本書によって初めて明らかにされたのである。ヴェルヌイユの遺族 (アデレイド夫人) を探し出し、彼の業績を再評価しようとした著者廣瀬氏の努力は極めて大きいと云わなければならない。

本書の概略は、まずヴェルヌイユの経歴を略述したあと (第1章)、動物、植物、海洋生物 (軟体動物、環形動物、甲殻類、棘皮動物、貝類) をモチーフにする文様及び作成法について記述している (第2-4章)。記述は著書『装飾のなかの動物』、『模様の組合せ』(1901), 『装飾構成の実際』(1904), 『縁飾り250』(1904), 『植物の研究, 工芸品への応用』, 『海の研究』(1913) の発行順にそってなされている。次いで、これら自然物をデザイン化 (当時の言い方では図案化) する法則を「転化」として紹介している (第5章)。ヴェルヌイユは図案作品だけでなく、多くの作家についての評論を含めて23冊以上の書物を著し、118件もの文章を雑誌『アール・エ・デコラシオン』に発表しているというが、本章ではその一部が利用されている。そして最後に、ヴェルヌイユの日本美術コレクションに基づいて彼のジャポニズムを解明しようとしている (第6章)。本書ではこれらの内

M.P. ヴェルヌイユと日本

容が多数の図版とともに B5版112頁に要領よくまとめられている。

著者はヴェルヌイユの自然重視によるデザイン化には自然主義、科学主義の姿勢が見られるという。ヴェルヌイユは自然主義という19世紀の一般的な傾向のなかで、ヴィオレ・デュ・レック寄りの科学的見方と詩的見方の融合を図り、とくに文様におけるアール・ヌーヴォー様式のデザイン化を実現した。その際、自然の観察に基づきながらも、模倣ではなく創作性を強調し、「科学的な」手法によるデザイン化を考えようとしたのだという。たしかにヴェルヌイユは彼に先行するイギリスの図案家、例えば H. コール、O. ジョーンズ、C. ドレッサー、W. モリスらの仕事をより一層進めて、独自の図案に達している。イギリスの作家らが自然主義的だとすれば、ヴェルヌイユらフランスの作家は図案化、文様化をより進めたということが出来る。当時、グラッセを取り巻く多くの図案家がいた。ヴェルヌイユの主著『装飾のなかの動物』の1年前に出版されたグラッセの著書『植物とその装飾への応用』(1896) の図版の大半を他のグラッセの弟子とともにヴェルヌイユが描いており、その後の『模様の組合せ』や『縁飾り250』では今度は彼が他の図案家の手を借りている。ヴェルヌイユはグラッセの弟子として出発し、やがて当時の図案界を統括し、グラッセの仕事を引き継いだように思われる。

本書は研究書というよりも一般向けの書物であるが、著者自身の独自の評価や視点といったものも多く見られる。著者がもっとも

評価するのはヴェルヌイユが日本美術品を収集し、その影響を受けたという点である。例えば、コウモリのデザイン化には自身が所有していた『萬工雛形画譜』（近藤清太郎編、明治19/1886）をヒントにしており、連続模様の作成には『唐草模様雛形』（滝沢清編、明治14/1881）を参考にしたと推量している。さらに著者はヴェルヌイユが日本の雛形集を参考にしただけでなく、逆に日本における図案科専門教育でヴェルヌイユの図案集が手本として使用されたことを指摘している。所謂逆輸入現象である。ヴェルヌイユが収集した日本美術品の多くはすでに散逸しているが、それでもいまなお錦絵、茶道具、鐺、雛形集、染型紙などが残されているという。著者は、彼がこれら染型紙、浮世絵などのコレクションを製作の参考にしたことを模様図案、挿絵、壺、七宝作品など、具体例をあげて推測し、ヴェルヌイユが「日本美術の基本が自然と共に生きることを理解〔することによって〕人を感動させ、心を動かすアール・ヌーヴォーデザインを生み出すことができた」のだと述べている。ジャポニスムに関する形式的表面的影響関係だけではなく、このような内面的な関係についての著者の記述には首肯できる点が多い。

これらの日本美術品の収集には、例えば友人である陶芸家シメンの日本人妻の弟を通じて収集するなどいろいろな手段を講じたこと、収集との関係は不明だが、やはり友人の画家メウは来日し、京都で鹿子木孟郎や稲畑勝太郎らにも会い、ヴェルヌイユにそのことを書き送っていることを著者は明らかにしている。これら新しい事実の詳細が解明されれば、ジャポニスム研究の新しい局面が開かれることも期待できるだろう。

ヴェルヌイユのデザインは所謂アール・ヌーヴォー様式ではなく、写生に基づく広範

囲な図案である。その過程については第5章で詳説されているが、とくに重要なのは転化の過程を直接転化、派生転化、連想転化の三種にわけて説明している点である。第一の直接転化はモチーフが花ならもとの花をそのまま描いて図案にしたもの、第二の派生転化は花の形に変化を加えたもの、第三の連想転化は元の形がわからないほど変化させたもので、ヴェルヌイユの図案は第二のタイプが殆どであり、そこでは美と用と材料が強調されるともいう。最後に単独模様のほかの縁飾りや地模様（連続模様）についてもふれ、ヴェルヌイユのそれと日本古来の連続模様を比較し、日本のほうが詩的だとしている。いわゆるアール・ヌーヴォー様式との造形的な関係、あるいは日本の図案家杉浦非水や津田青楓らの図案集などとの比較研究も期待されるし、ヴェルヌイユについて云えば、晩年に公表されたアール・デコ様式の図案集『万華鏡』（1926、『アール・デコ装飾文様2』（学研、1980）に復刻）への展開——著者は否定的だが——なども興味あるところだろう。

このように本書の随所において今後の研究方向が示唆されている。例えば、図案法については師のグラッセの著書『装飾構成の方法』（1911）との比較や、ヴェルヌイユの編著書の多くに顔を出す図案家らとの関係だけでなく、ベルギー、グラスゴー、ウィーン、チェコの作家との比較研究なども興味あるところである。いずれにせよ本書は近代デザイン史研究からみているいろいろな点で刺激的な著作であることは間違いない。フランス語版なども期待したいところである。